

2024. 11. 24 11 月第 4 主日礼拝

ルカ 18:9-14 「私をあわれんでください」

聖書

- 9 自分は正しいと確信していて、ほかの人々を見下している人たちに、イエスはこのようなたとえを話された。
- 10 「二人の人が祈るために宮に上って行った。一人はパリサイ人で、もう一人は取税人であった。
- 11 パリサイ人は立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。
- 12 私は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を献げております。』
- 13 一方、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神様、罪人の私をあわれんでください。』
- 14 あなたがたに言いますが、義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人です。だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。」

はじめに

先週は交歓講壇で内山勝牧師をお迎えしました。ルカ 15 章の放蕩息子のお話からみことばが取り次がれ感謝でした。弟息子と兄息子のお話で、弟は父の財産を散在した挙句、落ちぶれて惨めな姿で父の下に帰ってきます。父はいなくなった弟息子が帰って来たことに喜び、宴会を催しました。これを見た兄息子は怒って「ご覧ください。長年の間、私はお父さんにお仕えし、あなたの戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しむようにと、子やぎ一匹下さったこともありません。それなのに、遊女と一緒に父さんの財産を食いつぶした息子が帰って来ると、そんな息子のために肥えた子牛を屠られるとは。」(ルカ 15:29, 30) と言って、父に不満をぶつ

けています。この兄の態度は当時の宗教家、主にパリサイ人にたとえることができ、それが今朝の聖書箇所であるルカ 18:9-14 で扱われているのです。はからずも先週のメッセージと通じるところがあるのですが、今朝の中心テーマは 14 節にある「義と認められる」という義認の問題で、神さまの前に受け入れられる正しい人とは誰なのかをイエスさまは教えてくださいました。

1. パリサイ人的思考

ルカ 15 章の兄息子の姿に触れましたが、今日の箇所と共通点があります。兄息子は「ご覧ください。長年の間、私はお父さんにお仕えし、あなたの戒めを破ったことは一度もありません。」と言いました。この態度は 9 節の「自分は正しいと確信していて、ほかの人々を見下している人たち」に通じているのです。ここを以前の第三版の聖書では「自分を義人だと自任し…」と訳し、自分は正しい人間で神さまの前にも正しいもの、すなわち義人であると主張しているのです。ここの部分が、兄息子のお父さんの言いつけを一度も破ったことがないという主張と通じるのです。

自分が正しくて、あなたが間違っているという思いは、私たちの人間関係に常にあるものです。親子や夫婦という身内の関係や上司部下という職場の人間関係でぎくしゃくする理由は、皆が自分は正しくて相手が間違っていると思っているからです。お互いにそう思っているのでぶつかるわけです。イエスさまは、自分は正しいと主張し人を見下している人たち、特にパリサイ人たちを指して、祈りのために宮に上っていくパリサイ人と取税人を対比させて、一つのたとえ話をされました。

パリサイ人は心の中でこう祈りました。「神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。」(11 節)。「この取税人のようではない」ことを神さまに感謝しています。これは先ほどお話した兄息子とも通じ、「それなのに、遊女と一緒にお父さんの財産を食いつぶした息子が帰って来ると、そんな息子のために肥えた子牛を屠られるとは。」と弟のことを「そんな息子」と言って父に不満を訴えています。パリサイ人は自分が「この取税人のようで

ないこと」を感謝し、自分は放蕩三昧して帰ってきた弟のような、「そんな息子」でないことを感謝しているのです。ここにパリサイ人が自分を正しい者とする傲慢があるのです。

このパリサイ人の態度は皆が持っているものではないでしょうか。殊に信仰生活に関して言うなら、「私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと」(11 節)、「週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を献げております。」(12 節)と主張するように、ちゃんと聖書を読み、お祈りをし、礼拝に出席し、献金し奉仕もする、そんな真面目なクリスチャンがちゃんとやっていない他のクリスチャンを見て批判するのと同じです。不真面目でいいとは言いませんが、自分の真面目さを人と比べて「自分は正しい」と主張するなら、パリサイ的思考に陥っていると言っても良いでしょう。こうした姿勢をイエスさまは喜ばれません。ではイエスさまはどのような人を喜ばれるのでしょうか。それはパリサイ人とは対照的な取税人のような人です。

2. 取税人の姿勢

イエスさまが喜び、正しいと言ってくださる人、即ち義と認められる人は「義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人です。」(14 節)とありますように取税人です。「取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神様、罪人の私をあわれんでください。』」(13 節)と、パリサイ人は人に目を向けている一方で取税人は「目を天に向けようとせず」と神さまを意識しています。取税人は人と比べて自分がどうかという視点ではなく、神さまの前に自分はどうかという視点で自分を見ており、自分は罪人であると言っています。

パリサイ人は自分を義人だと自認し、取税人は自分を罪人だと自認しています。取税人は「自分の胸をたたいて」(13 節)とありますように言葉だけの上辺の悔い改めではなく、遠く離れて天に目を上げることもできないほど、心の底から自分は罪人だと思っているのです。事実当時の社会では取税人は売国奴というレッテルを貼られ嫌われていたので、自分が罪人であることを

受け入れやすかったと言えますが、職業的フィルターを外して「神様、罪人の私をあわれんでください。」(13節)と、深い悔い改めとともに神さまのあわれみと赦しを求めるならそれはすばらしいことです。このときの取税人はまさにこのような姿勢をもって神さまの前に祈りました。

神さまに受け入れられた人は、パリサイ人ではありません。この取税人の姿勢こそが神さまの前に正しい者、義人の姿です。パリサイ人は自分の正しさを主張しましたが、神さまの前からは退けられました。一方の取税人は罪人であることを認め、神さまの赦しを求めることで神さまに受け入れられる人になりました。「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。」(14節)は、謙遜であることを教える道徳訓ではなく、神さまに喜ばれ、神さまと良い関係を結ぶための必須の姿勢であり、イエスさまはそれをパリサイ人に教えるためにこのたとえを話されました。私たちもパリサイ的思考を持ちやすい者ですから、このたとえにしっかりと耳を傾けましょう。

3. 取税人の心を持つために

私たちが取税人の心を持つために、詩篇 19:7-14 を紹介して締め括ります。「主のおしえは完全で たましいを生き返らせ 主の証しは確かで 浅はかな者を賢くする。主の戒めは真っ直ぐで 人の心を喜ばせ 主の仰せは清らかで 人の目を明るくする。主からの恐れはきよく とこしえまでも変わらない。主のさばきはまことであり ことごとく正しい。それらは 金よりも多くの純金よりも慕わしく 蜜よりも蜜蜂の巣の滴りよりも甘い。あなたのしもべも それらにより戒めを受け それを守れば 大きな報いがあります。だれが 自分の過ちを悟ることができるでしょう。どうか 隠れた罪から私を解き放ってください。あなたのしもべを 傲慢から守ってください。それらが私を支配しないようにしてください。そのとき私は 大きな背きから解き放たれて 全き者となるでしょう。私の口のことばと 私の心の思いとが御前に受け入れられますように。主よ わが岩わが贖い主よ。」

私たちは聖書を神のことばとして信じています。神さまが私たちを祝福す

るために与えてくださったことばです。その神のことばによって、私たちの心を守っていただくのです。「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。」(ヘブル 4:12)とありますように、神さまは聖霊を通して、私たちの隠れた思いや心の隅に封じてしまった思いにまで光を届け、照らしてくださいます。その光を頼りに生きるのがクリスチャンの生き方です。みことばを通して神さまが照らしてくださった光に罪を示されたら悔い改めて歩み、神さまが喜んでおられると感じたらその道を感謝して歩んで行けばよいのです。傲慢の罪から守られるために、また私たちのことばと思いが神さまに受け入れられるために、みことばの光の中を歩んで行きましょう。そうするならパリサイ人的な歩みから守られ、真にへりくだった神さまに喜ばれる人に整えられていくでしょう。

まとめ

神さまの前に義とされる人は、自分で自分を正しいとする人ではありません。そうではなく、取税人のように自分の罪や過ち、または弱さや欠けを素直に認めて、神さまと人の前にへりくだる人です。そのへりくだりは作られたへりくだりではありません。遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて、「神様、罪人の私をあわれんでください」と祈る人です。神さまはそのような祈りに喜んで耳を傾けてくださり、あの兄息子に神さまが語られたように「私のものは全部おまえのものだ」(ルカ 15:31)と言って祝福してくださるのです。私たちは神さまの恵みによって赦された罪人ですから、どんなときも赦しの恵みに感謝し、前を向いて歩んで行きましょう。